

機関番号：24403

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007年度～2010年度

課題番号：19520082

研究課題名（和文） ワルシャワ・ゲットーでの文化活動に関するイディッシュ語資料に基づく思想史的研究

研究課題名（英文） A study of cultural activities in Warsaw Ghetto through reading of Yiddish materials from the point of history of ideas

研究代表者

細見 和之 (HOSOMI KAZUYUKI)

大阪府立大学・人間社会学部 教授

研究者番号：90238759

研究成果の概要（和文）：イツハク・カツェネルソンがワルシャワ・ゲットーで書いたイディッシュ語作品を読み込むとともに、ワルシャワのユダヤ史研究所、エルサレムのヤド・ヴァシエム、ニューヨークのユダヤ文化研究センター（YIVO）を訪れて関係資料を調査することによって、ゲットー蜂起に象徴される武装による抵抗ではなく、カツェネルソンらの周辺で行われた文化活動を背景としたユダヤ人の精神的な抵抗の意義を確認することができた。

研究成果の概要（英文）：Through the careful reading of Yiddish works written by Kazenelson in the Warsaw Ghetto and the various materials archived in The Center for Jewish History(Warsaw), Yad Vashem (Jerusalem) and Institute for Jewish Research (New York), I could confirm the importance of the spiritual fighting of the Jewish people around Kazenelson in the Ghetto.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	600,000	180,000	780,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総計	2,300,000	690,000	2,990,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・思想史

キーワード：ワルシャワ・ゲットー、ホロコースト、イツハク・カツェネルソン、イツハク・ツケルマン、エマヌエル・リングエルブルム、イディッシュ文化、ナチス

1. 研究開始当初の背景

ナチスによって強制的に作られたワルシャワ・ゲットーについて、従来の研究では、その最終局面で生じた「ワルシャワ・ゲットー蜂起」に焦点が置かれてきた。それによって、ユダヤ人が必ずしも「羊のように従順に」殺されていったのではないことが、もっぱら武装闘争という姿で確認されてきた。

それに対して、本研究においては、武装蜂起よりも、ゲットー内におけるさまざまな文化活動を重視し、とりわけ詩人イツハク・カツェネルソンと若いメンバーからなる社会主義的シオニスト「ドロール」の活動に焦点

を置いて、イディッシュ語の作品と資料を軸にして、彼ら、彼女らの文化活動の意義を思想史的な観点から研究しようとした。

とはいえ、カツェネルソンについて、日本では、私自身が訳者のひとりとなって翻訳・刊行された『滅ぼされたユダヤの民』（みすず書房、1999年）が知られるだけだった。しかもあの作品は彼がゲットーを生き延びたあと、アウシュヴィッツで虐殺されるまえにフランスのヴィッテル収容所で書き記したものである。あの作品からワルシャワ・ゲットーの最終局面を理解できても、ゲットーの日常やそこでの文化活動については、間接

的にしか知ることができない。また、彼がゲットーで書いていた作品を理解しないかぎり、それ以降に位置しているあの作品の意義も明確に捉えることは不可能である。

これはしかし世界的にも同じ状態であった、カツェネルソンがワルシャワ・ゲットーのただなかで書き残した膨大なイディッシュ語作品は、ほんのごく一部を除いて、他の言語にはいっさい翻訳されていない。ましてやその研究、さらにはそれをワルシャワ・ゲットーにおける文化活動一般と結びつける研究となれば、世界的にいま未開拓の分野であった。

また、そもそもイディッシュ語が戦後の日常世界から基本的に失われた言語であって、世界的に見ても研究者の数が非常にすくないうえに、ワルシャワ・ゲットーに関する研究の場合、その第一次資料が、ポーランド、イスラエル、アメリカ合衆国に分散して、本格的な研究を困難にしているのが現状だった。

これらの状態を克服するためには、カツェネルソンがワルシャワ・ゲットーのただなかで書いたイディッシュ語作品の精読と、ワルシャワ、エルサレム、ハイファ、ニューヨークという4つの研究所ないし博物館に所蔵されている資料をつき合わせる作業が、ぜひとも必要とされていた。

2. 研究の目的

まだまだ未解明にとどまるワルシャワ・ゲットーにおける文化活動の意義、端的にいうと決して武装蜂起には包摂されない、その「精神的な闘い」の意義を、カツェネルソンがゲットー内で書いた作品をはじめとしたイディッシュ語文献を軸にして思想史的な観点から浮かび上がらせることを、本研究の最終的な目的とした。そのために、以下の4つを具体的な目的とした。

(1) カツェネルソンがゲットーのただなかで書き残した膨大なイディッシュ語作品を、イディッシュ語の原文にそくして精読するとともに、さらにそれを、将来的に日本語訳の書籍として出版可能な精度をもつ形態にまで翻訳として仕上げること。

(2) ポーランド、イスラエル、アメリカ合衆国という3つの国に分散して収蔵されている、カツェネルソンおよびワルシャワ・ゲットーの文化活動に関するイディッシュ語の一次資料をできるかぎり探索し、整理すること。

(3) リングェルブルムを中心に収集されていた、ワルシャワ・ゲットーに関するイディッシュ語の記録を精読するとともに、当時の「ドロール」のメンバーやその周辺にいた人々のうちで、幸いにも生き延びた人々の回想録などを精読すること。

(4) カツェネルソンの作品、そしてそれと結びついていた「ドロール」の文化活動の意義を、武装闘争にはけっして包摂されないものとして思想史的な観点から浮かび上がらせ、「ドロール」の若いメンバーが体現していた戦闘的シオニズムの「戦闘性」を、武力闘争には包摂されない「精神的戦闘性」として把握すること。

3. 研究の方法

本研究では上記の目的を達成するために、以下の4つの研究方法にしたがった。

(1) カツェネルソンがゲットーで書き記していたイディッシュ語作品、およびワルシャワ・ゲットー内で歴史家リングェルブルムを中心に収集されていた、ゲットー内の文化活動の記録に関わるイディッシュ語資料の精読および翻訳。

(2) ワルシャワのユダヤ史研究所、エルサレムのヤド・ヴァシェム、ハイファ郊外のゲットー戦士の家博物館、ニューヨークのイディッシュ文化センターなどに収蔵されている、カツェネルソンおよびワルシャワ・ゲットーでの文化活動に関する貴重な一次資料の探索と整理。

(3) イツハク・ツケルマン、ツイヴィア・ルベトキンをはじめとした「ドロール」のメンバーを中心に、ゲットーを生き延びた人々の回想録を精読し、それを上記の2つの作品および資料とつき合わせること。

(4) 上記の手続きによって得られた成果を、もっぱらゲットー蜂起に焦点を置いた現在のイスラエルにおけるワルシャワ・ゲットーの記憶・表象のあり方とつき合わせ、その「戦闘的シオニズム」の意味を批判的に問い直すこと。

4. 研究成果

本研究によって、カツェネルソンがワルシャワ・ゲットーのただなかで書き残したイディッシュ語作品を軸にして、「ドロール」のメンバーらの文化活動のもつ「精神的な闘い」の意義をかなりの程度確認することができた。それは具体的には以下の成果の形をとった。

(1) カツェネルソンの膨大なイディッシュ語作品のうち、「ヘルシエレの死の記録」、「舞踏会」、「空腹の歌」、「寒さの歌」、「神よ怒りを注いで下さい」、「災いあれ」、「シュロモー・ジェルホブスキの歌」、「そのユダヤ人は笑った」、「ラジンのレツベの歌」など、主要なものを読み解くことができた。カツェネルソンのワルシャワ・ゲットーでの作品のかなりの部分が明らかとなった。しかも、カツェネルソンがゲットー内で書いた作品は、朗読や地下出版をつうじて、当時、ゲットーの住民たちに具体的に影響をおよぼすことがで

きたのである。とりわけ、「シュロモー・ジェルホブスキの歌」と「ラジンのレッベの歌」においては、カツェネルソンがワルシャワ・ゲットーのユダヤ人の「精神的闘い」を何よりも高く評価していたことを確認することができた。

①「シュロモー・ジェルホブスキの歌」は、トレ布林カへの「移送」開始に先立って書かれた、実在の人物シュロモー・ジェルホブスキの最後の姿を描いた作品である。ジェルホブスキは他の9人のユダヤ人とともに、町の市場で多くのユダヤ人が見つめるなか、見せしめとして虐殺される。ここでカツェネルソンは、ドイツ人の処刑台のうえで、同胞にエルサレムの歌を歌い、祈りと舞踊をしながら殺されていったジェルホブスキの姿を、きわめて崇高なものとして描き出している。ジェルホブスキは絞首台の縄が引き絞られる直前にこう呼びかける。「さあ、喜ぼう！ こんなふうで死んでゆくことは、ユダヤ人の誇りだ！／幸いなわれわれ！ われわれはユダヤ人全体のために死ぬのだ、殉教するのだ、われわれは！／絞首台で吊り下げられるのは、われわれの大いなる特権ではないか／さあ、歌おう、ユダヤ人たちよ、一つの歌を一緒に歌おう」

この歌の分析を中心にして、論文「ワルシャワ・ゲットーにおける『闘い』(2)」をまとめた。

②一方「ラジンのレッベの歌」もまた、実在の人物シュロモー・ライネルをモデルとしている。ただしこちらは、「移送」以前に書き始められ、「移送」開始によっていったん中断され、さらに「移送」が停止されたのちに、ふたたび執筆が開始され、最終的に3つの歌からなる大作として完成されたものである。ここではラジン出身の実在のレッベ（ユダヤ教ハシッド派でラビに相当する人物）シュロモー・ライネルに焦点が置かれ、彼がルブリンの虐殺されたユダヤ人に埋葬を施したのち、信者たちに断食を命じて、ゲシュタポの出頭呼び出しに応じて、二度と戻らなかった姿が描かれている。実在のライネルはむしろ武装闘争を呼びかけていたともされるが、カツェネルソンが重視しているのは「埋葬」と「断食」という、きわめて宗教的でありかつ精神的なライネルの「抵抗」である。カツェネルソンは序詩に相当する部分でこう歌っている。「ユダヤ人は剣で闘うのではない、違うのだ／ユダヤ人は銃の撃ち方も習っていない／ユダヤ人の両手は汚れなく、心もそうだ／汚れは何一つない、良心にも……／／それでいてユダヤ人はすでに血を注いでいる／それは彼の血だ、彼自身の血だ／私は君たちに英雄の歌を歌おう／まったく異なった種類の英雄の歌を」

なお、カツェネルソンはこの作品の執筆過

程で、妻ハナと二人の息子ベン・ツィオンとベンヤミンをトレ布林カに奪われている。このような背景に照らしても、この作品のもつ意義はいくえにも評価される必要がある。

この歌の分析を中心にして、論文「ワルシャワ・ゲットーにおける『闘い』」をまとめた。

③うえの2作に共通してうかがえるのは、武装闘争とはむしろ対極にあるようなユダヤ人の「精神的闘い」の姿の顕揚であり、カツェネルソンはこれらの作品をゲットーで「ドロール」のメンバーらを前にして朗読していたし、他の作品のいくつかは「ドロール」の地下出版をつうじてゲットー内に流通していた。

④これらの点を重視することによって、カツェネルソンの最後の大作『滅ぼされたユダヤの民の歌』の読み直しも可能となった。従来は、「ラジンのレッベの歌」を「受動的抵抗」の作品、『滅ぼされたユダヤの民の歌』を「積極的抵抗」の作品と、あたかも発展的に位置づける試みがなされてきたが、そのような理解ではとうてい不十分であることを明らかにすることができた。すなわち、『滅ぼされたユダヤの民の歌』においてもカツェネルソンの力点はあくまでユダヤ人の「精神的闘い」に置かれている、と解釈しなければならない。

(2) 4年間の研究期間をつうじて、ワルシャワのユダヤ史研究所、エルサレムのヤド・ヴァシェム、ハイファ郊外のゲットー戦士の家博物館、ニューヨークのイディッシュ文化センターに所蔵されている貴重な一次資料を探索することができた。とくにユダヤ史研究所には2007年と2010年、ヤド・ヴァシェムには2007年と2009年、2度にわたって滞在することができたのは貴重な機会となった。また、ゲットー戦士の家博物館では、かつてワルシャワ・ゲットーでカツェネルソンのもとで演劇活動を行っていたハウカ・ラバンさんに会ってインタビューすることができた。これも、大きな成果であった。

その成果を、神戸・ユダヤ文化研究会とモダニズム研究会において、発表した。

ただし、ワルシャワのユダヤ史研究所の資料、ハイファ郊外のゲットー戦士の家博物館の資料については、まだまだ十分な探索ができなかった。それぞれポーランド語とヘブライ語がアクセスの妨げになったところもあった。今後はさらに共同研究の形もとりながら、今回の成果を活かしてゆきたい。

(3) ツケルマンとルベトキン、ハウカ・ラバンらの証言をつき合わせることで、彼らがゲットーで行っていた文化活動を明確にすることができた。とくにツケルマンがその膨大な回想録において、武装蜂起よりもそれに先立つ地下ギムナジウム、夏季講習などの

教育活動を重視していることは重要であった。その成果もまた、すでに論文、研究発表のなかに組み込んでいる。

ただし、これらの回想録とリングェルブルムらが収集していたイディッシュ語資料とのつき合わせは、まだまだ不十分である。まずもって、リングェルブルムらの集めていた資料があまりに膨大であるため、本研究の枠内ではそれを十分に活かすことができなかつたことを認めねばならない。

(4) 本研究の最終的な結論として、カツェネルソンがゲッターのただなかで書いた作品において、ユダヤ人の「精神的な闘い」を何よりも高く評価していたこと、そして、彼とともに活動していたツケルマンら「ドロール」のメンバーがゲッターにおける自分たちの教育活動・文化活動の意味を高く評価していたことを確認することができた。さらに、そのような彼ら、彼女らのワルシャワ・ゲッターをめぐる評価と記憶が、現在におけるワルシャワ・ゲッターの記憶と表象にきちんと組み込まれるべき必要があることを説得的な形で確認することができた。

このことにはさらなる資料による裏づけが必要だが、大枠として以上のことを確認することができた。

以上の成果については、すでに述べたように、論文、翻訳の形で部分的にはあるが、すでに公表している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2件)

(1) 細見和之、ワルシャワ・ゲッターにおける「闘い」(2)、人間科学(大阪府立大学人間科学研究科)、査読無、第6号、2011年、pp. 137-171

(2) 細見和之、ワルシャワ・ゲッターにおける「闘い」——イツハク・カツェネルソンの大作「ラジンのレベ」をめぐる、人間科学(大阪府立大学人間科学研究科)、査読無、第5号、2010年、pp. 63-89

〔学会発表〕(計 2件)

(1) 細見和之、ヨーロッパ、イスラエルの旅から、神戸・ユダヤ文化研究会、2008年1月26日、こうべまちづくり会館

(2) 細見和之、ポーランド、イスラエル調査報告、モダニズム研究会、2007年9月14日、立命館大学

〔図書〕(計 1件)

細見和之、笠原一人、寺田匡ほか著『記憶表現論』、昭和堂、総296頁、2009年、細見和之「記憶のエコノミーに抗して」、

pp. 25-61

6. 研究組織

(1) 研究代表者

細見 和之 (HOSOMI KAZUYUKI) (大阪府立大学・人間社会学部・教授)

研究者番号：90238759

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：